総合討論

知花：岡田先生、ありがとうございました。それでは、ここからご来場の皆さまも交えて質疑応答に移りたいと思いますが、その前に山里先生もゴンザレス先生も、いただいたコメントに対するまたコメントか何かあるかなと思いますので、よろしかったら山里先生から、ぜひ泉水先生のコメントに対するまたご回答をいただければと思います。

山里：ありがとうございます。たくさんの貴重なコメントをいただいて、一つずつ回答を用意していたのですが、十分な時間がないと思います。

まず、日本との関係ですね。オリエンテーションの方は、日本からの留学生と沖縄からの留学生は別々に行われていました。沖縄からの留学生はカリフォルニアのミルズカレッジで行われていて、沖縄の人たちとアメリカの人たちの間の溝をいかに早く埋めるかということを、一番の目的として実施されていたように思います。陸軍省や国際教育機関、あとミルズ大学の先生も積極的に関わって、琉球からの留学生がどのような振る舞いをしているのか。まだアメリカの学生たちとの溝がある、それをどのように埋めようか、とても親身になって、家に招いたりするなどの積極的な関わりがあったということが資料から分かります。琉球人の留学生を対象にしたオリエンテーションはミルズカレッジの夏季休暇を利用して実施されていました。

アメリカ側はオリエンテーションに力を入れていました。日本からの留学生との関わりは、その時点ではなかったのですが、この別々のオリエンテーションが問題視されて、琉球人学生だけでまとめると、余計にアメリカ人との距離が出てきてしまうから、そういうのはやめようっていうことで、1960年後半からオリエンテーションがなくなりました。それ以後、沖縄の留学生と日本の留学生との関わりが多くなっていったかと思います。日本人留学生は私費留学で結構経済的に豊かな方が来ていたということもあるので、日本人と沖縄人という違い、認識を感じた背景には、経済的な環境の違いもあったのかと思います。

あと、アメリカ社会での観察の質問もそうですが、「日留」、「米留」ととどこまで同じ分析が可能かというご指摘も非常に重要で、「日留」に関してのほうが実は留学生の行動管理は非常に厳しくなされていたようです。留学生に対する思想調査があり、日本でどういった活動をしているのか、それを丁寧に細かく調べていました。また「日留」の場合は安保闘争の学生運動に関わりを持った留学生が結構いることから、沖縄に対する問題意識を高く持ち、経験に違いがあったと思います。

他の国々における米国留学との関係は私も非常に関心があって、これは学際的に共同研究が実現できたらと思っています。フィリピンの米国留学制度であったり、ミクロネシアの米軍の再教育について今回教えていただいたのですが、時代と対象が違えどアメリカ型の留学制度と植民地の統治実践には何か共通があるのではかなと考えています。

強制的に統治を強いるのではなくて、いかに主体的に留学生自身がその統治の体制を支持していくかという、主体性を重視した統治実践であったっていう点に、何か共通点が見いだすことができると思います。フィリピンの場合は植民地主義的な実践が色濃かったかもしれません。共通点として主体性を重視した統治実践を少し細かく見ていきたいなと思います。

知花：山里先生、ありがとうございました。ではゴンザレス先生。

ゴンザレス：コメントと私の著作を読んでくださったことに感謝します。いくつかの質問に答え、残りに関しては追ってお話ししたいと思います。

（映画の中のクーパーの）キスについての質問ですが、異人種間のキスではなく、フィリピン人同士のキスでした。以前はハリウッドだけがやっていたような非常にアメリカ的な行動だったためにスキャンダラスと捉えられました。しかも、カトリックの大聖堂の前で撮影したのです。そういったことで非常に怒りを覚えた人たちもいました。これがキスについてです。

クーパーがフィリピン人と見なされていたのか白人と見なされていたのか、そして彼女の法的地位がいかなるものだったのか、というのはいい質問だと思います。簡潔に答えるなら、それは誰に尋ねるかによって変わります。マッカーサーはクーパーをフィリピン人だと捉えていたと思います。それこそが、彼がクーパーとは結婚せず、2 人の白人妻とは対照的に不義の愛人としていた理由です。

彼女の移民としてのステータスにもある種の不透明さがありますが、それはこの時期の多くの移民の地位が曖昧だったことによります。彼女は船で行き来するとき、父親に由来するアメリカ市民権を主張し、自分の姓を用いました。そして彼女自身、特にハリウッド時代は自分がフィリピン人女性であるか、白人でアメリカ人であるかについて、とても戦略的かつ創造的に使い分けていました。

彼女は自分の年齢についてもよく嘘をつきました。彼女はとても創造的な人で、公文書にも彼女が自身について述べた嘘が書かれているので、公文書館で彼女の経歴をたどるのはとても難しかったです。この本のリサーチに時間がかかったのはそういう理由でした。彼女は有名な俳優ではないのになぜ彼女について書くのか、その理由について質問されましたが、彼女が有名でないからこそ書くのです。実際、彼女はよく話題となり、多くの人が夢中になるキャラクターでした。

多くの人々が、このフィリピンの女性が報われない愛に苦しんだり愛されなかったが故に自殺をしたという物語に魅了されました。しかし私はそれが真実ではないと思います。というのは彼女が自殺したのは 1960 年で、彼女とマッカーサーの関係は 1934 年に終わっており、その後彼女は二度結婚していたからです。私は歴史家ではなく、自分の専門はカルチュラル・スタディーズだと考えていますし、文学研究出身です。しかしこのケースでは、私はこの物語が誤解されていると考え、再び調査する必要があると感じました。

Securing Paradise から *Empires Mistress* にどのようにテーマを移行させたかについてですが、実際には両者は非常に関連しています。*Securing Paradise* では、帝国の非正規または合法なアーキテクチャーを考察しています。なぜ売春やセックスツーリズムを取り上げなかったのかということは多くの人に訊かれましたが、ある意味でこの物語はそれらの要素と関係しています。そして、私はいつも秩序を乱す、行儀の悪い女性に惹かれてきました。

知花：ゴンザレス先生、ありがとうございました。それでは会場の皆さま方、何かご質問あるいはコメントがありましたらお受けしたいと思います。

一般参加者 2：クーパーが自殺した理由について、美貌で、美しい人だったのが年齢に伴い容姿が衰えたからという理由なんでしょうか。

ゴンザレス：分かりません。彼女はロサンゼルスで自殺したので、ロサンゼルスの郡公文書館で記録を調べましたが報告書はありませんでした。死亡診断書と薬物過剰摂取という判定から彼女が自殺したと分かるだけです。この時点で彼女は 60 歳近く、ハリウッドの有色人種の女性としてそれは実質的に死刑宣告のようなものでした。だから、確定的な証拠はありませんが、孤独感が原因だったと思います。仕事が得られず、60 年間にわたりモノ扱いされてきた人物です。ですから彼女が絶望に陥っていたと考えています。

知花：ありがとうございます。他にご質問、コメント等ございますか。

岡田：山里先生にご質問ですが、さっきペンシオナードと沖縄の「米留組」のお話が出たんですけど、私は最初に研究したのが植民地教育で、そこでペンシオナードの話もちょっと触れました。教育行政の中だと、ペンシオナードは圧倒的にエリートになっていく人たちですね。そういう表象のされ方もとても大切で、一番有名なのがカミーロ・オシアスっていう人です。でもさっき山里先生のお話を聞いたところ、(「米留組」で）そういう政治エリートになっている人は少ないという印象を受けたのですが、そういう理解でいいですか。それとももっとエリート養成的な側面がこの留学制度でもあったのでしょうか。

山里：エリートっていうところが、ちょっと沖縄の文脈で難しいところかなと思います。沖縄戦で荒廃した沖縄で一から社会を形成していく中で、知識を得てリーダーとして育っていくという一面はありますが、それをエリート育成と呼ぶべきかというところが私自身の中ではまだ腑に落ちていないところです。

岡田：数の問題もあるかもしれませんが、単純に言うと、フィリピンの教育行政制度の中だと比較的トップの方にアメリカ人が残っていて、その人たちがやめていった際に跡を継いだ人に、フィリピン人の元ペンシオナードが多いというイメージがあります。だからペンシオナードの場合は行政官の養成という一面があります。しかし、沖縄の場合、もっと中間層の教員層の養成を目指していた、という印象でした。そこら辺の違いをどういうふうに理解したらいいのかというのが質問の趣旨です。

山里：中間層の育成っていうところが大きかったと思います。ただ復帰に伴い生活が大きく変わり、「米留組」の中には職を失った者、外資系企業や民政府自体の職がなくなるということがあったので、留学経験という資本が維持されているわけではなかったと思います。

知花：ありがとうございます。私も実はいくつか質問はありますが、お時間になってしまいましたので、ここで質疑はいったん終了とさせていただきます。以上をもちまして神奈川大学アジア研究センターシンポジウム「アジアとアメリカ帝国のはざまを生きた人々の物語り」を終了させていただきます。最後までご参加いただき誠にありがとうございました。

後記：当日のゴンザレス氏の発言は全て英語によるが、本稿編集に際し質疑応答の部分については編者が翻訳・整理を行った。

（編集：むらい　ひろし　所員　神奈川大学外国語学部教授）